

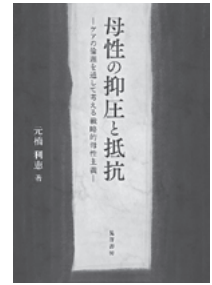
◆書評◆

元橋利恵著

『母性の抑圧と抵抗

ケアの倫理を通して考える戦略的母性主義』

(晃洋書房 2021年 ISBN 978-4-7710-3443-3 3900円+税)



古久保 さくら

(大阪公立大学 人権問題研究センター)

「母性」を、あるいは「母親という経験」を積極的に評価することは、ジェンダー研究にとってなかなか難しいことであつたように思う。

女性学が誕生した背景には近代的性別役割分業への問い直しがあつたのであり、女性学の初期段階においてジェンダーという概念は、生物学的性を根拠に女性を母親としてのみみなそうとする運命論への批判として機能していた。日本においても、近代化とともに女性に対して「良妻賢母」として特に母親役割が強調されてきたことは明らかであり、母であることを肯定的にとらえようとすることは、性別役割分業＝近代的ジェンダーを肯定することになるのではないかという警戒感が、ジェンダー研究の基底に存在していたように思われる。

だがしかし、ジェンダー平等社会の実現を考えたとき、「母親という経験」を積極的に評価することが今まさに必要とされているのではないか。『母性の抑圧と抵抗—ケアの倫理を通して考える戦略的母

性主義—』と題された本書は、まさにこのような問題意識に貫かれている。

新自由主義的価値が圧倒的力をもつポストフェミニズム期において、産み育てることの自己責任化が一層進んでいる、と著者は主張する(序章)。それは恋愛の自己責任化とあいまって、どのような相手と性関係を結び、どのような子育て協力をその相手から引き出せるか、そのこともまた自己責任とみなされるような息苦しさでもある(第4章)。(家の外で)働くことがデフォルトとされた(それは2015年の女性活躍推進法により完成形を迎える)現代において、「働く」と「産み育てる」ことの両方の「選択」の結果責任を、女性たちは一身に引き受けさせられているのである。

この過重な負担を強いられている状況に対し、著者はM・ファインマン、E・キテイ、岡野八代などケア・フェミニズム研究を理論的支柱として(第1章)、「戦略的母性主義」を主張する。特に著者が参照しているのは、サラ・ルディクの「母的思考」を

めぐる議論である。ルディクは、母親の活動すなわち「母親業」を「思考」であり「理性」に基づくものとしてとらえる。そのうえで、母親が行っている実践と思考を、ケアと社会化の両側面から考え、母親業においては自分と比べて圧倒的に脆弱な存在である子どもの要求や必要に答えることへの関心に貫かれることを必然とする一方、母的思考は、自らがおかれている社会と対決し、別のあり方を変革していく潜在的な力をもつと主張する。なぜなら、子どもを社会化させる過程は、現状存在する社会を肯定するだけでなく、この場所が子どもにとって安全で適切かを問うことを必然とするからである。かつ、母親業を通じて、子どもという他者の人生と母親という自分の人生の間で個人の「自由」をめぐって、他者を傷つけることなく折り合いをつけようとする葛藤を、非暴力的解決につなげようと試行錯誤を続ける力も養成される。このルディクの議論とは、私的空間でのケア行為が公的空間での社会変革をもとめる行為と必然的に結びつくことを示唆するものである(第2章)。

このルディクの議論を参照しつつ著者は、母親たちの経験や実践に政治的可能性を見出し、母親の政治的なエンパワメントを重視する視座を戦略的母性主義として、積極的に評価しようとする。本書では実証研究として、2015年に登場した「安保関連法に反対するママの会」(以後ママの会と略)を事例として考察してい

る(第6章・第7章)。

ママの会は、政治に関心をもちつつも、既存の労働組合や政党の運動に包摂されてこなかった若い世代の母親たちの政治参加の新しい回路となった団体である。

かつての母親大会の母親が母親という「属性」によって政治的主体になろうとしたことに対し、ママの会の母親は、個人的経験をもとに政治的に主体化する、と著者はいう(第5章)。育児期待が上昇すると同時に自己責任化する現代にあって、ママの会に参加した母親たちは、常に自らの母親業について説明し周囲の理解を得る必要に迫られている。それゆえ、政治的活動現場においても自分の経験や不安について具体的に言葉を尽くして訴える力をもっている(第6章)。著者はこのママの会の活動について、女性たちの経験が多様化し、母親であることではすぐにはつなげられない現代という制約の中で、不可視化され個別に経験されている母親業は政治的テーマの根幹にあるとして、政治的主体になる過程そのものが、母親のエンパワメントとなりえていると評価する(終章)。

まさに、母親であるがゆえに政治活動が制限されるという母性の抑圧に対抗する姿として、「戦略的母性」の表れをママの会の母親たちに見出すのである。それは母親という「選択」をした女性に対し、自己責任や自助努力を押し付ける現代において、母親が政治的主体になるための回路としての「戦略」だと評価できるのだ、と。

ケア論の枠組みを参照しつつ、「母親という経験」が政治的主体を形成する、とする議論はオリジナリティが高く、たいへんに刺激的な力作である。

とはいえ、1950年代の母親大会に対する「属性」としての母親の政治参加と、ママの会の「個人的経験」に基づく政治参加、という対比のあり方には、私としては同意できないところもある。「母」であることを称揚されながら、子どもを兵士として国家に差し出すことが期待され続けてきた戦時中の母親の「経験」があったからこそ、「母親」としての平和を希求する母親大会が共感と呼んだのではなかっただろうか。その「経験」ゆえのラディカルな要求を、母親の「属性」の枠に閉じ込めようとした政党政治からの圧力はあったものの、母親大会を「属性」に基づくものとのみ評価するのは、果たして正当なのだろうか、という疑問はある。

また、ママの会の活動(政治的活動)の継続の困難をみつめるとき、「戦略的母性」の実現は、道半ばではないのか、とも思われる。

本書におけるママの会の母親へのインタビューの中では、ママの会の政治活動を行いつつも、ママ友コミュニティの中で政治の話をする困難も語られている。自分が政治的であることが子どもの友人関係に影響を与えるのではないか、という不安が語られており、また、子どもの生きていく将来を考えるからこそ行う政治

的活動ではあるが、その活動ゆえに子どもの成長への関わりが不十分になったのではないか、という内省も語られているのである。いわば、「母親の経験」に基づく政治活動が、その一方で「子ども」の成長と矛盾しないか、という恐れをママたちは感じざるを得ないわけだ。

「子どもにより良い社会を残したい」という思いを実現するためにこそ政治活動を行いたいという思いと、子どもの今を大切にするためにより関わりたいという思いとが、葛藤を引き起こす状況はいまだ克服できていない。

もっというならば、「戦略的母性」の実現のためには、一人の子どもに対して「母親という経験」をする複数の大人が必要であり、その複数の大人が交互に政治的活動をしたり、あるいは子どもの様子を見ながら、子どもの「自由」と「成長」を最大限生かしながら、子どもも連れて政治的活動をしたり、という判断を行っていくことが必要のように思われるのだ。「母親という経験」を行う人とは、家族の中でも外にでも存在しうるだろう。「母親という経験」が、産んだ母親に特化されず、性別からも自由に存在しうる時、初めて、「戦略的母性」という政治的主体の戦略性は担保されるのではないか。本書を読みながら、私自身はそう思った。

しかしながら、だからこそ、本書は今後の「母性」をめぐる研究の発展のための重要な礎になる研究であると言える。